

〈書評〉

牛島 万 著

『米墨戦争前夜のアラモ砦事件とテキサス分離独立 ——アメリカ膨張主義の序幕とメキシコ』

明石書店 2017年

上智大学（名誉教授） 今井圭子

I. はじめに

本書は、著者がライフワークの一つとして長年取り組んできた「米国膨張主義と米墨関係」に関する研究成果をまとめた労作である。著者は史学を専攻した後国際関係論の分野にも研究領域を広げ、歴史学の研究手法の上に国際関係論の学際的アプローチを採り入れることによって、多面的、複合的な視点から総合的に捉える研究を目指してきた。

著者はその30年余に及ぶ研究生活のなかで、本書の研究課題に関連する論文をすでに多数発表するなど、着実に研究業績を蓄積してきている。そしてその成果は本書にも部分的に組み込まれているが、大半は出版に向けて新たに書き下ろされたものである。

II. 本書の内容要約

本書の内容を要約しておこう。まず章立ては以下の構成になっている。

まえがき

第1章 アラモ砦事件前史

第2章 メキシコからみたテキサス暴動の制圧の意義
——サンタアナのテキサス進攻

第3章 アラモ砦事件と籠城者の性格をめぐる論争

第4章 アラモ砦陥落とサンタアナの暴虐性をめぐって

第5章 「アラモ砦」事件をめぐる史実と伝説の相克
——生き証人による語りの伝承における問題を中心に

第6章 もう一つのアラモ——ゴリアッド虐殺事件

第7章 サンハシントの戦いとテキサス独立

第8章 映画『アラモの殉教者』をめぐる文化批評

第9章 現代テキサスの表象としての「アラモ」と「カウボーイ」

——歴史文化の観光化と政治化

あとがき

関係略年表

史料

本書の課題は以下のように要約できる。すなわち 1836 年に起こったアラモ砦事件を「米国史に特有な領土拡張主義政策を象徴する代表的な事件」（本書 3 頁）として捉え、同事件からテキサス分離独立に至る過程の全体像を描くことにより、米国膨張主義の理念と政策が定着していく端緒となる背景を、メキシコとの関係において跡付けていく。

著者は 19 世紀前半のこの膨張主義は、その後米国西部開拓の西漸運動から太平洋、アジアへの勢力拡大へと向かい、「大陸帝国」から「海洋帝国建国の野心」（同 4 頁）へと拡張されていったと考える。そしてアラモ砦事件の背景にある政治理念はその後の膨張主義政策、さらには「現代米国の政治理念と共通するものがある」（同 3 頁）とする。

このように米国ではアラモ砦事件に対して歴史上重要な位置づけが与えられ、学問的関心も高く、多くの先行研究が蓄積されている。他方メキシコにおいてはそれが国土喪失に至る敗北の歴史過程であり、国民の関心は低く、研究も今後待たれる部分が多い。

こうした研究状況を踏まえ、本書ではとくにメキシコの動向を十分踏まえながら米墨両国の文献、資料を踏査し、過去の歴史と現代社会との関連性に着目しつつ、複数のディシプリンを用いて歴史の関連分野にも及ぶ総合的な考察を試みるとしている。

以下各章ごとに内容をみていこう。

まず第 1 章ではアラモ砦事件が発生する前のテキサスをめぐる歴史的背景について論じる。テキサスは 1821 年、メキシコの独立によりその領土の一部としてスペインの植民地支配から脱し、1823 年にはメキシコ連邦内のコアウイラ・テキサス州となった。

ところで当時の米国、メキシコはともに独立後の不安定な政治状況を抱え、建国に向けての様々な試練に直面していた。米国では国家統合をめぐる連邦派と州権派の対立が続き、後者は南部を中心に州の権限を強く主張する分離主義的政治制度を目指していた。また統一国家の形成に際して『『ホワイトネス』ともいうべき白人の優秀性とそれに付随した人種差別という思想』（同 18 頁）が提唱され、白人以外人間は野蛮とみなされ、「征服」、「教化」の対象とされた。未開拓な南西部の先住民居住地域に

加えて、テキサスを初めとするメキシコ領の征服も米国政府の大きな関心事であった。

またメキシコでは独立後保守派と自由派、連邦派と中央集権派の対立が続いたが、自由派主導のもと 1824 年憲法が發布され、「連邦制の導入、上下院制の導入の他、カトリシズムの国教化、聖職者や軍人に対する封建的特権の容認」(同 24 頁) が盛り込まれた。

メキシコ政府は 1823 年帝国入植法を公布し、国外から入植者を受け入れて未開地の開発を進めようとした。そして入植者に対して「カトリックへの改宗、メキシコ憲法と法令の遵守、国境付近や沿岸部への入植禁止など」(同 25 頁) の条件を課し、土地を与えた。メキシコでは奴隷制が禁止されていたが、テキサスでは奴隷制が認められ、入植後「7年間の免税、輸入の自由など」(同 25 頁) の優遇措置が講じられていた。こうした政策のもと米国からテキサスへの入植者が急増してメキシコ系住民の人口を大幅に凌駕するまでになり、様々な問題が生じることになった。

その対策としてメキシコ政府は 1830 年、テキサスにおける奴隷制禁止、米国人のテキサス移住禁止の法令を發布し、支配体制の強化に努めた。しかしそれはテキサスの米国人入植者の不満を募らせ、メキシコからの分離独立を求める反乱へと発展していった。

第 2 章では独立後のメキシコにおける政治情勢を踏まえながら、1836 年アラモ砦事件当時の大統領で国軍最高司令官であったサンタアナの生い立ち、経歴を紹介し、テキサス暴動制圧の意義について考察する。独立後のメキシコは、白人、混血、先住民と人種構成が複雑で、人種間の差別意識が根強く、また前述の政治的対立も激化していた。

こうしたなかベラクルス州出身のサンタアナが地方首領として、また軍人として輝かしい実績を積み、1833 年には大統領に就任した。そして中央集権的支配体制を強化する政策を実施していったが、それは地方の強い反発を招くことになった。

テキサスにおいてもメキシコ政府に対する反乱が各地で勃発し、1836 年 3 月 2 日、テキサスは独立を宣言した。そして 4 日後の 3 月 6 日には主都サンアントニオのかつて伝道所があったアラモ砦において、テキサス軍とメキシコ国軍が戦闘を交えるに至った。アラモ砦で直接戦ったテキサス軍は、米国人入植者や不法入国者などの正規軍および義勇軍によって構成され、総勢 180 人ほどであったが、サンタアナ率いるメキシコ軍は 2000 人を超えていた。様々な対立要因により国家統一が難航していたメキシコにとって、「テキサスの分離は対外的にはメキシコ国の弱体性を露呈することになり、その後の米国の侵略が憂慮」(同 55 頁) される重大な事態であり、テキサス分離独立闘争の制圧には国家存続の命運がかかっていた。

第 3 章ではアラモ砦事件前夜の背景を、米国側から砦籠城者の性格を中心に論じる。アラモ砦の戦いをめぐる研究には三つの動向がある。第 1 は「米墨戦争と並んで、

米国のいわゆる領土拡張主義の一環でなされた戦争であると理解し、米国史全体」(同 58 頁)のなかに位置付け、実証的に分析する方法、第 2 は「テキサス戦争期においては、米国南部の主導による土地拡張主義者、換言すれば、米国南部の奴隷制支持者、とりわけ綿花農園を経営するプランターが主流で(中略 今井)米国政府を逸脱した米国南部の謀略であった」(同 58 頁)とする説、第 3 はテキサス独立戦争に米国政府は直接介入していないとし、「外国人である不法戦士による暴徒や占拠が最も成功した事例」(同 58 頁)として捉える見解である。著者は第 3 の視点にたつメイの説を修正する議論を展開する。

まず米国政府のテキサス政策を跡付け、政府はかなり早い時期から関心をもっていたものの、「米墨戦争勃発までに明らかな国家的な関与はなかった」(同 59 頁)とする。そしてアラモ砦事件への不法戦士(「他国の内政に武力干渉する戦闘員」同 59 頁)の参加について、籠城死した 180 余名の出身地を調べた結果、不法戦士の割合は少なく、彼らの暴動とすることには問題が残るとする。そして戦闘の主導者としてジム・ボウイ、トラヴィス、デイビッド・クロケットをとりあげ、各々その経歴を辿り、アラモ砦の戦闘に身を投じるに至った背景を探る。三人とも米国人であるが、テキサス生まれではなく、前二者はテキサスに移住しメキシコ国籍を取得、クロケットは 1835 年テキサスに到着し、翌年義勇兵としてボウイとトラヴィスの軍と合流した。三人の職業をみると、「ボウイはプランター、奴隷貿易等、トラヴィスは教師、弁護士、ジャーナリスト、プランター等、クロケットは狩猟、農業、州議員、連邦議員」(同 72 頁)と多様であるが、共通点として彼らのテキサス移住の背景にはいずれも深い「失意」の念があり、テキサスを自己再生の新天地として選んだのではないかとする。

第 4 章ではアラモ砦が陥落に至る背景、戦闘の過程について論じる。籠城した戦闘員全員が戦死あるいは処刑されたが、メキシコ軍最高司令官サンタアナは、テキサス側、米国側からは「微塵の情け」もない残虐、暴虐な人物とされ、それが米国人のメキシコに対するイメージの一端を形成してきた。他方メキシコではこの点に関する研究は少なく、むしろこの問題に触れることを避けようとする傾向もみられる。

そこで著者はサンタアナの戦闘行為を検証しながら、その客観的評価を試みる。まずサンタアナがテキサス軍に投降の機会を与えたことに注目する。また武装した捕虜を銃殺刑に処したことにつき、当時においても「国際法上、非人道的で違法行為の疑いがあった」(同 83 頁)というのが米国側の有力な見解である。それに対して、この戦闘を国家間戦争でなくメキシコ国内における民間武装集団による反乱と捉え、「内乱罪等で刑事処分した、というメキシコ国内法を尊重する立場も当然のことながら、道理にかなっている」(同 83 - 84 頁)とする。さらにテキサス側には奴隷を所有し、奴隷を伴って籠城した軍人もいたのに対して、メキシコ領コアウイラ・テキサス州では奴隷制が禁止されており、この戦闘においても女、子供など非戦闘員に加えて、奴

隷も解放されている。

こうした考察をとおして、著者は「サンタアナが目指したのは国の統一と安全であり、具体的には中央集権制と軍事的圧力の強化」で、アラモ砦では「法制維持のための法的暴力、つまり『正義の暴力』」を行使したのであり、「サンタアナ個人へ責任を期するものではない」（同 91 頁）としている。

第 5 章では「アラモ砦」事件についてその歴史的事実と伝説の相克を、「生き証人による語りの伝承」に焦点を当てて考察する。アラモ砦事件にかかわったテキサス軍側の生存者は極めて少なく、その証言の大半は本人による直接の言説ではなく第三者を介した伝承である。そのため信憑性には問題が残ることを断りながら、生き残ったとされるトラヴィスの奴隷ジョー、ディキンソン、マダム・カンデラリアの言説を、伝承をとおして検討していく。主な論点はサンタアナと奴隷解放をめぐる問題、テキサス軍側の砦内戦闘状況、籠城への参加と非参加の意思を問うテキサス軍司令官による「トラヴィスの線」の真相、「アラモ砦の英雄」デイビッド・クロケットの戦死説と処刑説などである。

著者も述べているように、「言説が個人の語りではなく、まさに伝承過程において、他者の語りにすり替わっていることが、二重の歪曲の可能性を高める要因になっている」（同 115 頁）。史実と言説、伝承の「相克を乗り越え、歴史学者はどうすれば真実の探求に努めることが可能なのか」（同 116 頁）、残された課題であるとしている。

第 6 章ではアラモ砦事件 3 週間後、同じくテキサスの独立を求めて勃発したゴリアッドでの戦闘について、その背景と経緯、現地における両軍司令官の行動を検証する。

ゴリアッドでのテキサス側犠牲者の数はアラモ砦事件の 2 倍に及び、極めて悲惨な結末がもたらされた。それはテキサス軍側司令官ファニンが自らの軍劣勢のなか、これ以上戦闘による犠牲者を出さないため、メキシコ軍による無条件降伏の提案を受諾したことに起因する。メキシコ軍の現地司令官ウレアが「できるだけ多くの兵士の人命を保護するために政府に交渉することを約束したため」（同 123 頁）、ファニンは投降を決した。

ウレアは約束どおりメキシコ政府に要請したが、現地にいなかったメキシコ軍最高司令官サンタアナは、政府の回答を待つことなく捕虜に対する刑の執行命令を下した。それに対して現地のメキシコ軍のなかには、軍医など非戦闘員の捕虜を探し出し、銃殺刑を免じるため最大限の力を尽くしたものもいたと伝えられている。

このようにウレアに代表されるような捕虜の人権尊重派に対して、国内法、軍法、軍律を最重視し、捕虜に対する銃殺刑を断行させたサンタアナは、アラモ砦に次いでゴリアッドでも虐殺を命じた残虐非道な人物としてテキサス、米国側の憎悪の対象となった。他方テキサス軍側については、アラモ以上の犠牲者を出しながら「ゴリアッドでの犠牲者は、アラモほど後世の人間に英霊として祭り上げられること」（同 118

頁) はなかった。それはアラモ砦ではテキサス軍が降伏を拒絶し砦を死守したのに対して、ゴリアッドでは、無条件降伏により銃殺されるという無念な結果に終わったからであろうとする。

第7章ではテキサス軍がメキシコ軍に対して最終的な勝利を手にしたサンハシントでの戦闘を辿り、テキサスが独立を勝ちとるに至る過程について論じる。論点はアラモ砦、ゴリアッドでの相次ぐ勝利にもかかわらず、サンハシントでメキシコ軍があっけなく敗北したのは何故かという疑問、そしてテキサス軍司令官ヒューストンと、メキシコ軍司令官サンタアナの評価をめぐる議論である。メキシコ軍敗北の理由として一般的にいわれているのは、一つに相次ぐ惨敗がテキサス軍の士気を高揚させたこと、二つにメキシコ軍はシエスタ（昼休憩）をとっており、即座の応戦ができなかったという説である。

それに対して本章ではこれらの理由を再検討し、以下のように捉える。まずテキサス軍側は圧倒的に有利な地に陣取り、加えて偵察により正確な情報を入手していた。他方メキシコ軍側は、各地の反乱に対応するため軍を分散し、兵力を弱体化させてしまっており、それらがメキシコ軍に敗北をもたらす主因となったとする。

メキシコ軍はサンハシントで惨敗し、サンタアナはテキサス軍に捕らえられた。ヒューストンはサンタアナ解放の条件として、テキサスからのメキシコ軍即時撤退とテキサス独立の承認を提案し、サンタアナはそれを受け入れ、解放された。この降伏によりサンタアナは国民の信頼を失い、権力の座から追われることになった。しかし翌年フランスのメキシコ侵攻を機にサンタアナは再び呼び戻され、権力の座に返り咲いた。

他方ヒューストンはアラモ、ゴリアッドからの援軍要請を断り、味方を見殺しにしたという過去のマイナスのイメージを払拭できず、サンハシントでの勝利にもかかわらず、アラモの戦死者ほどには英雄視されてこなかった。しかし現実の政治過程においては、テキサスの初代大統領に就任し、テキサス共和国の建設を推し進めることになった。

第8章では、文化的側面から映画に描き出されたアラモ砦事件について考察する。アラモ砦事件を扱った映画は、メキシコ革命期にあたる1911年から1915年にかけて4本製作され、そのなかの『アラモの殉教者』を題材に、そのあらすじと特色を紹介する。この映画には「二項対立技法」、すなわち白人と非白人、健常者と非健常者、男性と女性を対置させ、前者をより優れたものとする価値観が貫かれている。すなわち自由と独立を求めて戦うテキサス軍、アングロサクソン系白人の勇気と自己犠牲の精神を称え、反対にメキシコ軍とメキシコ系非白人を「野蛮」、「残虐」という固定観念で捉えている。

メキシコ国内が革命で混迷していた当時、「米国政府は、メキシコ革命の煽りを受

けないように、米国内の治安維持」(同 153 頁)を図る一方、他方ではメキシコにおける安定した親米政権の樹立を求めている。そして米国内の社会的不安定要因となっていたメキシコ系住民を「駆逐」の対象とみなし、メキシコに対しては反感とともに強い関心を抱いていた。そうした時代的背景のなか、「野蛮」で「残虐」、かつ不安定な「メキシコから独立したテキサスおよび米国に対する賛美を、映画というメディアを用いて謳おうとしたのではないか」(同 154 頁)というのが、著者の見解である。

ところで「映画は文化的表象に留まらず、その社会的影響を考えると、『文化』の再生産装置として寄与している」(同 178 頁)。そして白人を優越視する「ホワイトネス」は、「戦時におけるホワイトネスに依拠した暴力性により、正常な思考が麻痺し」(同 178 頁)、戦争に勝利した後の平時においても止まるどころか激しさを増していったとする。

第 9 章ではアラモ砦事件、テキサス共和国の分離独立の歴史と、現代社会との接点に焦点を合わせ、アラモ砦を「現存する歴史的文化的遺産」であると同時に「文化的表象」として位置付け、その意義と変容について考察する。

アラモ砦事件の舞台となったテキサスは、米国の中心部から遠く離れた辺境で、「荒野性」と統治力の及ばない「無法地帯」であり、メキシコとの間に長年にわたる対立、抗争を繰り返してきた。そうした状況からテキサスを守る存在が「カウボーイ」や「テキサス・レンジャーズ」で、彼らは「英雄、自由、民主主義、生と死、勇気、闘い、勝利等のメタファーであり、国家が推進した論理である」(同 181 頁)。また「暴力、無法者、男根主義などの負の要素を排除することにより、現代版『カウボーイ』が生成」(同 181 頁)され、アラモ砦の戦士はカウボーイの表象として、映画やドキュメンタリー映像をとおして、「非日常化、再魔術化されている」(同 181 頁)とする。

さらにテキサスにおけるアングロサクソン系白人とメキシコ系非白人の抗争の背景を、経済史の視点から次のように説明する。自給自足的な農牧業が営まれてきたスペイン領メキシコ以来の経済に、アングロサクソン系白人が奴隷制に依存する綿花プランテーション経済を持ち込んだが、それは奴隷制を禁じたメキシコ社会との軋轢をもたらした。またメキシコ人による羊や馬の牧畜に対して、アングロサクソン系白人は牧牛を中心にグローバルな資本主義経済を浸透させ、それはメキシコ人から広大な土地を奪う方向へと展開していった。その結果土地を失ったメキシコ系住民は労働者として白人の牧場で働くか、テキサスの辺境かメキシコへ追いやられることになった。

こうしたテキサスの歴史のなかでサンアントニオは、スペイン植民地時代の布教の場としてのミッシヨナリーの遺跡、そしてアラモ砦での独立を求める誇り高き戦闘の場という歴史的文化的財の地として位置付けられている。そしてアラモ砦は現在もアメリカ膨張主義の表象としての存在感を顕示し続け、脆弱で「野蛮」なメキシコからの独立を求めて戦ったアラモの戦士たちは、自由と民主主義、正義の実現のために犠牲

となった「英雄」であり、誇るべき「カウボーイ」としてのメタファーが再生産されているとする。

Ⅲ．本書の意義と若干のコメント

まず本書の意義として指摘したいのは、アラモ砦事件からテキサス分離独立に至る過程を、アメリカ膨張主義と米墨関係を踏まえながら客観的な視点から歴史的事実を跡付け、評価を試みたことである。アラモ砦事件は、米国においては1898年のメイン号爆破、1941年の真珠湾攻撃と並ぶ「三つのリメンバー」(同4頁)として広い関心を集めてきたのに対して、メキシコ側では広大な領土喪失への前哨戦とされ、関心を集めるテーマではなかった。こうした研究状況のもと、英、西語文献、資料を駆使して事実を明らかにし、それに基づいた客観的評価を試みたことの意義は大きい。

アラモ砦事件の背景を考察するにあたり、奴隷制に依拠したテキサスの綿花経済と独立後のメキシコ政府による奴隷制廃止政策の対立、アングロサクソン系白人とメキシコ系非白人の間の宗教、言語、社会習慣など様々な側面での軋轢、また捕虜処遇における国際法と国内法の解釈を巡る見解の相違など多角的な視点から論点を提起している。そしてそれらに関して文献に依拠しながら従来の見解を再検討し、内容要約でも述べたように、米国側の偏向した説に批判を加えている。

著者はアラモ砦事件からテキサス分離独立に至る過程を、政治、社会、経済的側面に加えて、史実と伝説、映画をめぐる文化批評へと考察の領域を広げる。そしてその手法に依拠しながら、アラモ砦事件の犠牲者が「独立の自由、正義の追求、そして米国への忠誠のために尽力した勇士」(同196頁)として称えられ、それが現代テキサスにおいても「正義、自由、英雄」の表象であるカウボーイをとおして再生産されていく経緯を辿る。これは著者が長年目指してきた学際的アプローチを採り入れた歴史研究の試みで、社会科学から人文科学に及ぶ学際的研究には、広く深い知識に支えられた蓄積が求められる。その意味で本書における著者の試みは挑戦的であり、新しい歴史研究の一つの方向性を示すものとして注目される。

次に本書に関する若干の問題点と残された課題について述べておきたい。

まず「アメリカ膨張主義」という用語についてであるが、本書では武力行使も厭わない領土拡張主義として用いられており、それは本書が対象としている時期においては適切な捉え方である。しかしその後19世紀末以降の帝国主義的侵略期において米国は欧州諸国の領土獲得競争とは距離をおき、また20世紀後半以降は世界の「自由」と「民主主義」を守る覇権国として、さらにトランプ現政権においては「アメリカ・ファースト」のもと、自国の利益確保のためには孤立主義も辞さずの姿勢をみせている。「アメリカ膨張主義」についてはこのような歴史的変容を組み入れた用語として

理解する必要がある。

上記の問題提起に関連するが、アラモ砦事件を経て1836年テキサスは独立、共和国となり、翌37年米国がテキサス共和国を承認、テキサス共和国は米国への併合を望んだが、米国内の奴隷州と自由州の対立により承認されず、ようやく実現したのは1845年であった。この間米国政府にとっては領土拡張の膨張主義より奴隷制是非論の方が重要な政治課題であり、「自由」の理念も、当時のテキサスにとっては奴隷主が奴隷を所有する自由であり、他方自由州にとっては奴隷が解放され自由になることであった。

こうした米国政府の奴隷制論争と膨張主義の狭間で、当時アラモ砦事件とその犠牲者はどのように評価され、その後その評価はどのような変遷を辿って現在に至っているのか。例えばアラモの戦士のメタファーとしての再生産は、現在「銃規制」で苦悩する米国社会にどのような影響を及ぼしているのか。今後の研究に期待したい課題である。

またアラモ砦事件は直接的にはメキシコ政府の入植政策の失敗に起因するが、その遺産は現在に至るまで米墨両国の関係に大きな影響を及ぼしてきた。著者が指摘するように、トランプ政権による米国のメキシコ移民締め出し政策は、両国関係に大きな軋轢を生じさせている。この問題に関して過去の経験からどのような教訓が引き出せるのか、今後に向けてさらなる研究が望まれる。

以上、本書の意義といくつかの問題点および今後の課題について要約した。多分に評者の研究関心に引き寄せたコメントになったことを認めなければならない。いずれにせよ、本書はアラモ砦事件を米墨関係とアメリカ膨張主義の観点から考察するという、日本で未だ先行研究が乏しい課題をとりあげ、学際的アプローチを採り入れながら総合的歴史研究を目指した意欲的著作である。パイオニア的業績として評価すべき労作であり、今後のさらなる研究の発展に注目したい。

